

シンデレラ物語の原点

The Origins of the Cinderella Story

監修：浜本隆志 関西大学名誉教授

時代を超えて世界中で語り継がれてきたシンデレラ物語
多くの女性を虜にしたメルヘンの原点をひもといていきます



1-001

シンデレラ物語の構造

ガラスの靴にきらびやかなドレス、王子様との結婚というドラマチックなエンディング。世界中の女性を虜にし続けるシンデレラの物語は、1950年にディズニーによって作られたアニメーション映画が大ヒットし、ロマンチックなメルヘンの代表格として世界中に知られることとなりました。そのため、現代ではシンデレラといえばディズニーという印象が強いのですが、この映画の原案となった物語は「サンドリヨン、あるいは小さなガラスの靴」(1697年)で、ルイ14世による絶対王政時代に活躍したフランスの童話作家シャルル・ペローによって書かれたものです。そんなに古くからシンデレラの物語があったのかと驚く人もいるかもしれませんが、シンデレラの類話は、それよりもっと昔の時代から存在していて、古代エジプトから中近東、アジア、北アメリカなど、ほぼ世界中の地域に分布していることがわかっています。

シンデレラの類話は、世界中に広がっていきなかつた、その国ならではのエッセンスや時代性などが加わり多彩なバリエーションが生まれていきましたが、どの話も基本構造はほぼ同じであり、シンデレラ物語に欠かせない普遍的な要素が組み込まれています。

では、シンデレラ物語の基本的な構造とはどんなものか、振り返ってみましょう。重要なポイントは次の5つになります。

(1) 継母とその連れ子の姉2人のいじめ、幸せな生活の崩壊

シンデレラの類話で共通するのが、母親を失うことによってヒロインの平穏な生活が崩壊することから物語が始まることです。シャルル・ペローのシンデレラでも、幸せに暮らしていた娘が、母親の死と、さらに父親の再婚相手である継母とその連れ子からのいじめによって、家事労働を強いられる、という辛い状況に追い込まれます。

(2) ヒロインの援助者が出現する

不幸な境遇に落ちても健気に働き続けるヒロインを助けてくれるのが援助者の存在です。シャルル・ペローのシンデレラでは、名付け親であり、後見人でもある妖精が援助者として登場します。シンデレラは彼女の魔法でドレスとガラスの靴を身に



1-002

時代によるドレスの変遷

ペロー版のシンデレラでは、「宝石をちりばめた金、銀のドレス」と説明があり、グリム版も「金銀のドレス」という記述があります。しかし、リチャード・アンドレ版では「黄色のシルクのドレス」との記述があるなど、手がける作者・画家、また当時の流行などによってドレスの描写、色や形は様々でした。

ところで、「シンデレラのドレスは何色？」と聞かれると、ブルーを連想する方が多いのではないのでしょうか。これは明らかにディズニーのシンデレラの影響が大きいでしょう。女の子らしい色といえばピンクや、花嫁の象徴である白も適していると思われます。実際、1950年に公開されたアニメ映画の「シンデレラ」は実は白いドレスなのです。ですが、現在のキャラクターグッズなどはすべてブルーのドレスで、2015年の実写版映画でもブルーでした。なぜディズニーはシンデレラのドレスをブルーに定着させたのでしょうか。

1918年の子ども服業界誌「アーンショーズ」では、興味深い記述を見ることが出来ます。当時、ピンクとブルーは男女問わず子ども服の人気色であったようですが、読者からの「どちらが男の子向けで、どちらが女の子向けなのか？」という質問に対して、「一般的には、ピンクは男の子、ブルーは女の子に適している」という回答がされています。理由としては、ピンクは「毅然としていて、強い印象を与えるので、男の子向き」、一方ブルーは「繊細で、優美な色なので女の子に向いている」と書いてあります。この言及は、現在の私たちのカラーイメージとは真逆です。ただ、当時は子ども服の色に今ほどジェンダー区分がなかったというのが実状だったようです。

ほかにも、「青は聖母マリアを描くときに使われた色で神聖で高貴なイメージがあり、ヨーロッパでは最高級の意味で使う色だったから」「青は幸福や平和の象徴として使われる色だから」など、様々な憶測がありますが、ディズニーがブルーのドレスを採用した理由ははっきりわかっていません。

1-025



王子はシンデレラをホールを中心に連れていくと彼女の手をとってダンスを踊りました

1-026



1-027



1-028



1-029



1-030



ドレスの再現プロジェクト

1枚の挿絵から
「再現ドレス」を作りました



舞踏会へ向かうシンデレラがまとうドレス。それまでのみすぼらしい姿から一変して、シンデレラが美しいレディに変身する瞬間は、シンデレラの物語でもっとも感動的な場面の1つではないでしょうか。

ドレスを再現するプロジェクトは、展示会を開くにあたって、ぜひ1着ドレスを展示したいと思ったのがきっかけで動き出しました。再現するのは、1800年代の絵本のなかで特に気に入っているドレスで、さらに一緒に描かれている王子様の衣装も、ヘアで作ることになりました。

生地は、協賛してくださった株式会社オカダヤ様から提供いただき、ドレス制作は文化服装学院の先生と学生さんにご協力いただけることになりました。たった1枚の挿絵、しかも正面からのアングルしかない状態から衣装を再現することはなかなか大変な作業だったようです。しかし、できるだけ当時の雰囲気近づけようということで、細部までこだわって作っていただきました。

王子様の衣装は、1700年代くらいの服飾のイメージで描かれているらし



1-031 『小さなシンデレラ』アメリカ/1858年

く、制作を担当してくださった先生が生地を手染めし、現代であればジッパーなどを使うところも、すべて当時の作法に合わせてボタンをつけてくれました。ドレスのほうは、1850年代頃のオーストリア皇女エリザベート（ドイツ語ではエリーザベト）時代に流行ったデザインで、クリノリン（パニエ）を使ったボリュームのあるスカートが特徴です。こちらも生地などは当時の素材にこだわって作っていただきました。エリザベートといえば、ヨーロッパ宮廷一と謳われた美貌の持ち主。もしかしたらこの絵本も、エリザベートのドレスがモデルになっていたのかもしれませんが、シンデレラのドレスといえば、ディズニーで描かれているブルーのイメージが強いです。1800年代の絵本では赤やピンクのドレスが多く描かれていたのも特徴です。

また、本当に履けるガラスの靴も、吹きガラス職人の中村昌夫さんに作っていただきました。

このようにたくさんの協力を得て、当時の宮廷文化を思わせる豪華な再現ドレスが完成しました。

ガラスの靴も再現しました



1-032 『シンデレラ、あるいは小さなガラスの靴』アメリカ/1904年



シンデレラ物語に登場する様々なキャラクターたち
時代や作家によって、その描かれ方も多様です

シンデレラ

裕福な家に生まれた、美しく心のやさしい娘。母の死と父の再婚によって生活が一転、継母と2人の姉に辛い仕事を押し付けられても、一生懸命に働きます。舞踏会に行きたいと思っても自分の身なりでは行けないとあきらめ、1人になってから涙を流す、とても慎み深くおとなしい女性。王子様と結ばれてから、謝罪する姉たちを許し、宮殿に住まわせるなどもシンデレラのやさしさを感じさせる部分です。

ペロのシンデレラがどこまでも受動的なのに対して、グリム童話のシンデレラは、自分から舞踏会に行きたいと継母に訴えたり、ハシバミの木をお願いしに行ったりと、とても積極的です。ディズニーのシンデレラは、同じく辛い境遇に置かれながらも、明るく健気に生きる女性として描かれています。どんな動物とも仲良くし、動物たちがトラブルに見舞われると継母や姉たちの害が及ぶ前に助けに行くなど、友達を大切にするやさしさも印象的です。



1-045



1-046

その娘は、母親ゆずりの思いやりとやさしさを持った美しい少女でした



1-050



1-047



1-048



1-049



1-051